

転ばぬ先の杖

離れて暮らす

老親介護

進学や就職を機に、故郷を離れたきたビジネスマンは多い。実家を離れるとき、親は巢立っていく息子や娘に、ガンバレと声援を送ってくれたことだろう。

多忙になるにつれ、実家に帰る回数は減る。子の多くは、結婚し新たな家族を築く。実家とはまったく違ったライフスタイルを形成する。子の成長過程では、子ども中心の生活となるのが一般的。

大きくなっても、受験や就職とイベントは続く。住宅ローンと教育費に追われ、帰省に使う費用を惜しむことも。

いつの間にか、実家を出て20年、30年が経過する。この正月、帰省して久しぶりに親と向き合い不安になった人もいるにちがいない。

「親父、老けたな…」

「お袋、だいじょうぶだろうか」

このまま、別々に暮らしていてもいいのだろうか。この先、どうなるのだろうか、と不安になる。

老親を放っているような後ろめたさと罪悪感。親不幸なのは…。同居という選択肢が頭に浮かぶ。

しかし、自分の親と同居したいと言い出せば、配偶者はどう反応する

<1>

NPO法人パオッコ

理事長

おおた さえこ

太田 差恵子

のか恐ろしい。配偶者にも老親はいるわけで、「うちの親はどうするの」と言われかねない。

そもそも、同居するにも仕事があるからUターンできない。親だって、住み慣れた家を離れ都会に出てくるだろう。

もしも出てきたとしても、一緒に暮らした経験のない自分たち家族とうまく折り合っていけるのか。嫁姑トラブルなんてカンベンだ。部屋も足りない。あれこれ思いを巡らしつつ、「遠距離介護」という言葉に行き当たる。

離れて暮らしながら、親の介護をするって可能？

次回以降、方策を考えた
(10回連載予定)

同居しないのは親不孝？

【略歴】1960年生まれ。介護・暮らしジャーナリスト、NPO法人パオッコ(離れて暮らす親のケアを考える会)理事長。AFP(日本ファイナンシャル・プランナーズ協会会員)。著書に『老親介護とお金』(アスキー新書)など多数。